

<特集>

1970年代日本における Translation Studies の芽生えとその行方 —『季刊翻訳』と『翻訳の世界』を中心に

Translation Studies in Japan in the 1970s – *Kikan-honyaku* and *Honyaku-no-sekai*

佐藤＝ロスベアグ・ナナ

Nana Sato-Rossberg

(SOAS, University of London)

Abstract

Japanese Translation Studies is widely thought to have emerged just after the turn of the millennium. However, already the recently rediscovered journal *Kikan-honyaku* (Quarterly Translation, 1973 – 1975) documents a clear interest in Japan towards establishing translation as “science”. Previously I argued that *Kikan-honyaku* represents the beginning of Japanese Translation Studies during the 1970s (Sato-Rossberg 2014). This raises the question why the field did not grow in Japan as it has elsewhere.

In this paper, I analyze two journals published in Japan during the 1970s, to explore the early history of Japanese Translation Studies. A tension develops between development of translation theory on one hand and increasing emphasis on efforts to simply identify “right” and “wrong” translations on the other hand, a reflection of the relationship between the two journals and professional translation schools. Thus it appears that strong commercial demands in Japan overwhelmed the academic study of translation, rather than nurturing it.

1. はじめに—翻訳を学問するということへの関心

『季刊翻訳』(1973年—75年)という翻訳に関する雑誌は、時折言及はされるものの、日本における Translation Studies (以下 TS) の萌芽として注目を集めることはこれまでなかった。「共振と呼応」(佐藤＝ロスベアグ 2014)ですでに言及したように、本誌には翻訳論 1 に高い関心を持つ編集者がいて、多角的に翻訳を研究しようとする姿勢が多様な執筆者陣によって表現されている。筆者は、本誌を日本における TS の萌芽と位置づけ考察することによって、西欧における TS の確立と日本における TS 史との関連性が明確になると考えている。明治以降、今日まで、さまざまな意味で西欧の影響下にある日本が、西欧の TS の動きに無関心であったとは考えにくい。むしろ、影響は受けたが何かの事情により西欧のように展開しなかったと考える方が自然だと思われる。

『季刊翻訳』は刊行後 2 年で廃刊し、入れ替わるように『翻訳の世界』(1976–2000、大学翻訳センター、現 DHC)が刊行され始め、日本の経済成長と翻訳ブームの中で翻訳誌として重要な位置を占めることとなる。

本稿では、なぜ 1970 年代に芽生えた TS が、日本では育たなかったのかという問いに答え、70 年代以降の TS の流れの過程を追うために、『季刊翻訳』と『翻訳の世界』の掲載論考や編集後記から、まずは、それぞれの刊行目的や意図を検証する。その後、『翻訳の世界』における「翻訳論」への取り組みを聖書翻訳の観点から考察し、また特に『翻訳の世界』誌上で人気のあった「誤訳の指摘」とその影響について概観する。最後に、西欧とは異なる展開として、日本的な特徴として認識されている翻訳専門(専修)学校、そして翻訳通信講座設立と 2 誌のかかわりを見て行く。

本稿の目的は、1970 年代に日本で芽生えた Translation Studies の行方を当時刊行されていた翻訳の雑誌を中心に考察することによって追うものである。

2. 『季刊翻訳』から『翻訳の世界』へ

『季刊翻訳』は 1975(昭和 50)年に第 7 号を刊行したが、その後、第 8 号は刊行されなかったようだ。第 7 号においては、紙不足に関する言及があるので、石油危機による影響があったと推察できる。翌年の 1976(昭和 50)年からは大学翻訳センターの『翻訳の世界』が入れ替わるように刊行され始める。

『季刊翻訳』は編集を日本翻訳研究会として、1973(昭和 47)年から 3 年間にわたってみき書房から刊行された。『季刊翻訳』の編集は、日本翻訳研究会となっている。本誌には、翻訳を学問に押し上げ、翻訳論についても考察する研究誌という自覚を持って発行されており、創刊号には 8 つの編集方針が掲載されていた。もっとも重要な最初の 4 つを以下に引用しておきたい。

1. 『季刊翻訳』は〈広い意味の翻訳〉について、多角的な研究と情報の伝達を目指す専門誌です。
2. これまで翻訳については、我が国近代文化の形成のうえできわめて大きな役割をはたしてきたにもかかわらず、それを正面から論じることは、残念ながらひじょうに断片的にしかおこなわれておりません。この雑誌は、じっさいに翻訳にたずさわる専門家だけでなく、翻訳になんらかの関心を持つ人々からの発言を、幅広く求めています。
3. それはまた、読者として、単に文学に限らず、社会科学でも自然科学でも、およそ翻訳に関係のあるあらゆる分野の方々を想定していることにはほかなりません。
4. すなわち、この『季刊翻訳』を、翻訳を通じて、文学や文化を、さらには政治を、経済を、そして社会を考えていく共通の広場としたいわけです。(下線強調筆者、『季刊翻訳』1号, 1973 p. 222)

1において、〈広い意味の翻訳〉と断り書きがあることに注目していただきたい。ここでは、いわゆるテキスト翻訳のみを翻訳としているのではなく、文化翻訳や翻訳の思想まで射程に入れていることを示している。日本における既存の翻訳研究が論じてきたように、現代日本語だけではなく日本文化そのものが翻訳の影響を色濃く受けていることは否定できない(たとえば、芳賀徹編『翻訳と日本文化』2000 年他)。「読者として、単に文学に限らず」という一文からは、人々の中に翻訳とい

えば文学翻訳という風潮があったことを表している(佐藤＝ロスベアグ 2014)。

『季刊翻訳』には、「誤訳」に関する指摘もあれば、翻訳論には否定的な論考も掲載されていた。しかし、以下に述べるような、例えば文化翻訳に関する論考は現在の TS のその分野を先取りするようなものであった²。

—どうだったヨーロッパは？

—うんたしかにあったよ

という冗談めいた会話で始まる文化人類学者であった米山俊直のエッセイはまだまだ海外旅行の値段が高く、海外とは誰でもが行ける場所ではなかった時代性が反映されている。当時の翻訳家たちにとって、海外とはそのように遠い存在であったことは再認識しておいた方が良さだろう。その「たしかにある」ということ(1973 p.102-4)は、翻訳という行為を行うには、翻訳者が言語を習得しているだけでは十分ではなく、そこには文化翻訳の問題や実質的に翻訳不可能なものが介在することを指摘する。例えばアフリカの広範囲で農耕民の常食であるウガリやウジは日本のトウフと同様にうまく他の言語には訳せないと米山は言う。

自分のやった翻訳に自信がないから云うわけではないが、ほかの人の訳した翻訳書にケチをつけることを私は好まない。しよせん、ある言語体系で完成している文章を、他の言語体系に移しかえることには無理がある。(・・・)無知ということは、人間にどこまでもつきまとうものであろう。翻訳のなかでもそれをできるだけ回避してゆくためには、その対象にできるだけ密着して“たしかにある”ことを確かめていくほかあるまい(1973 p. 104)

米山はここで翻訳不可能性に絡めて誤訳指摘をやんわり批判し、理想的な行為として、翻訳者にフィールド実践をすすめる。文化人類学者らしい発言ともいえるが、例えば著名な翻訳家である鴻巣友季子が、翻訳する前に実際に「実感する」ことを実践するために、あちらこちらを飛び回っていることは興味深いことである(鴻巣 2011)。

紙幅の関係もあるので、すべての論点に言及することはできないが、本特集のほかの論考群も参考にさせていただくとして、序文ですでに論じたように『季刊翻訳』で行われていた画期的な議論は学問としての翻訳が体系化され日本に誕生する可能性があったことを示唆しており重要である。また、例えば誤訳の指摘を有効だと信じそうする者と、誤訳を不毛とする異なる意見を持つ者たちが『季刊翻訳』という同じ土俵で議論を行っていたのは興味深く、一方的な意見を掲載するのではなく、多角的に検証しようとする雑誌の姿勢がうかがえる。

それでは、この『季刊翻訳』と入れ替わるように刊行された『翻訳の世界』はどのような目的を持って創刊されたのであろうか。創刊号の発行日付は11月1日で、発行人は吉田嘉明、編集人は湯浅美代子とある。吉田は1972(昭和47)年に創業された大学翻訳センターの創業者であり、現代表取締役である³。湯浅は1977(昭和52)年に日本翻訳家養成センター(現バベル)を設立、現

在も会長を務めており、バベル翻訳大学院の学長でもある。また日本翻訳家協会を立ち上げ、そこでも会長を務め、翻訳業界に貢献している人物である。1976(昭和 51)年に刊行された創刊号には、当時日本翻訳家教会会長であった高橋健二や副会長であった佐藤亮一などが創刊の辞を寄せている。佐藤は1973(昭和 48)年に国際翻訳家連盟総会 (Fit, International Federation of Translators: 国際翻訳家連盟)⁴ に出席して感銘を受けた様子で「各国の翻訳界がいかにも現実の社会の進展と要請にこたえようとしているかを私は知った。しかも、多数語をあやつる翻訳者がいかに貴重な存在であるかを改めて思い知らされた」と記している。ここからは西洋における翻訳者の地位向上に向けた活動を目の当たりにして、佐藤が刺激を受けたであろうことが伝わる。また佐藤は欧米の大学だけではなく日本の大学でも翻訳について講義を行うことが増えてきていることに言及し、次のように文を締めくくる。

わが国の翻訳に対する関心が必要に応じて高まり、翻訳家をめざす研究者が増大しつつあるとき、大学翻訳センターで「翻訳の世界」誌を刊行するに至ったことは、今後翻訳家をめざす人々のために大きく貢献するであろう。(佐藤 1976 p. 52)

「翻訳家をめざす研究者」とは大学で学問を行う翻訳者のことを指しているようである。佐藤は研究者の増大に言及しており、この時代に日本で翻訳に対する関心の高まりがあったことを示している。もちろん、このような高まりがなければ、のちに言及するように、専門学校が設立され、翻訳の通信教育講座ができて、『季刊翻訳』や『翻訳の世界』が創刊されることもなかったであろうし、国際基督教大学や上智大学で翻訳論の授業が開講されることもなかったであろう(佐藤=ロスベアグ 2014)。

同時に、本誌は FIT との連動もあり、『翻訳の世界』は翻訳家の地位向上に着目していたようで、創刊号には、特別寄稿としてズラトコ・ゴリアン(前国際翻訳家連盟副会長)の「翻訳者の保護に関するユネスコの勧告案によせて」や武富紀雄による「前進する翻訳家の地歩」を掲載している。FIT との連動があったことを理解しておくことは、日本における翻訳への関心の高まりと西洋との関係性、またはその影響という観点から重要であろう。

『翻訳の世界』をさらに読み進めると、文学翻訳だけではなく、実務性を前面に押し出そうとしていたことが創刊号の内容と編集部の後記からわかる。

(・・・) 翻訳というと、一般に学術関係、とくに文学を想定される向きが多いと思うが、翻訳志望者もやはりこの方面が多い。ところが、実際には各官庁、諸企業などの実務面の翻訳者が大いに必要とされている。実務に堪能な語学優秀者が望まれているわけである。小誌ではこの点にも特に着眼し、実務翻訳講座を設けて意欲的に実務翻訳に取り組むつもりである。また誤訳の諸問題を多角的に探ろうとの意図もあるが、とにかく読んでおもしろいものにしたい。(1976 p.90)

この編集後記を執筆したのは、(湯)というサインから創刊号の編集人であった湯浅であったと思われる。『季刊翻訳』の編集方針の3にも「単に文学に限らず、社会科学でも自然科学でも、およそ翻訳に関係のあるあらゆる分野の方々を想定していることにほかなりません」という文章があったことを思いだせば、当時の風潮としては、翻訳といえば文学が想定され、他の領域の翻訳があまり知られていないという現状があったと推察できる。

『季刊翻訳』との違いを言えば、実務翻訳と誤訳の諸問題を積極的に扱いたいと明記してあることであろう。『翻訳の世界』第2号以降は実践翻訳講座というシリーズを設け、「文学」「特許」「エレクトロニクス」「医学」などさまざまなジャンルの翻訳実践教育を行っていた。この実務翻訳への関心は『翻訳の世界』からより強調されるようになった視点であり、先に引用した湯浅の後記にもあるように、高度経済成長とともに実務翻訳家へのニーズが高まっていたためであろう。

『季刊翻訳』でも文化人類学関係の研究者が論考を寄稿していたことはすでに述べたが、それは『翻訳の世界』でも同様であった。『翻訳の世界』の1980年代編集長を務めた今野哲男はそのインタビューで、「70年代は文化人類学が非常に元気な時期ですから、その影響からか比較文化的な視点が強かったと思います」と回想している⁵。

1977(昭和52)年に刊行された第2号では人類学者の祖父江孝男が「訳語の選択と統一への提言」(祖父江 1977 p. 10)で白人開拓者たちとインディアン⁵の間で通訳による紛争がしばしば起きていたことに言及し、以下のように書いている。

(・・・)例えば白人とインディアンの間の境界の柵がこわれたようなとき、ただそれだけを表現するにもナヴァホ語では「動物によってこわされたとき」「人間があやまちでこわしたとき」「人間が意図的にこわしたとき」等々によってすべて表現が違ってくる。ところが英語ではそんなに綿密でなくて、言いかたはただ「こわれた」(broken)というひとつしかないものだから、両者の間にたった通訳は英語からナヴァホ語へ訳するときなど、自分の判断で適宜補足して訳す。ところが補足のしかたが違ったりしてあとでとんでもない結果を招いた場合は多いのだ。

上記の祖父江の論考は、例えば今日のコミュニティ通訳、とりわけ法廷や医療通訳の場合を考えると、わかりやすいのではないか。それぞれの言語において何が大切なのかに対する認識の違いが、各々の言葉に反映されていて、そのような言葉を他の言語に通訳することの困難さを表している。例えばAという言語に存在する概念や言葉がBという別の言語には存在しないというように。そして、そのような言葉をどう通訳し、または通訳者の采配で補足するのかによって、時と場合によっては、通訳や翻訳は人の生死に関わってくる可能性を持つのである。同様のことを指摘する青木保の論考「人類学から見た翻訳機の位置」は、日本で緑と呼ばれる色を英語にすると green だが、イギリスで green とされている色が日本の緑とは異なることを指摘し、「人類学研究に携わっている人たちは、"green"が実は緑じゃない、文化によっては緑と見えない、緑と認識されない——つまりことばで表現されたことと実態の格差というものを強調する、あるいは多くの事例によって指

摘する、というようになってきていますね」と述べている(青木 1977 p. 31)。

当時、『翻訳の世界』で取り上げられていた文化翻訳の論考を考察してきた。このような傾向は今野が指摘するように人類学への人気もあったと思われるが、おそらくは、翻訳というと文学翻訳が自動的に想像されるその連鎖を断ち切る目的、そして、翻訳という行為を行うためには、原文を理解するための語学力はもちろんのこと、その文化的背景を理解することがいかに大切であるかを読者に伝えたかったのではないだろうか。翻訳家でもあった中村保男も以下のように記している。

季刊『翻訳』がいつのまにか消えたと思ったら、入れ替わるように『翻訳の世界』が出た。創刊号を読んで気づいた第一の事は、本誌が翻訳を単なる技術と見ず、広い文化的視野で翻訳を再検討する姿勢を強く打ち出している事である。無論、翻訳の基礎は語学力であり、原文読解力であるが、その原文がなぜそのように書かれねばならなかったのかという民族的、歴史的、文化的な必然性を把握していない限り、いくら語学力があっても正しい翻訳はできない。(・・・)(中村 1977 p. 7)

『季刊翻訳』と『翻訳の世界』の掲載内容や編集後記などを比較し、各々の雑誌の意図や目的を考察してきた。大学翻訳センターを発行所として刊行された『翻訳の世界』は、1977(昭和47)年の4月から発行所が日本翻訳家養成センターへと変わり、湯浅美代子が発行人となる。1978(昭和48)年1月号の「編集室から」には、第3号から編集人を務めている杉浦洋一が「又、文学だけでなく、自然科学、社会科学を含めてあらゆるジャンルの翻訳の問題をカバーしながら、日本における「翻訳論」の整備にも微力ながら努力したい」と『季刊翻訳』の編集目的に似たような文章を寄せつつ、翻訳論への意欲を語っている(1978 p.134)。

『季刊翻訳』から『翻訳の世界』へと移り変わる中でのそれぞれの目的や意図を概観してきた。この考察から、2誌の間で大きな方向転換はなかったということがわかった。のちに述べるように、『翻訳の世界』でも翻訳論を求める編者のコメントが掲載されていたし、実際に翻訳論に関する連載も行われていた。とはいえ『翻訳の世界』では実務翻訳という分野が強調して取り上げられるようになり、また第4項で論じるように誤訳を批判する論考がより増えていったことは指摘できるだろう。

3. 「翻訳論」

別稿で、『季刊翻訳』では翻訳論という言葉が頻繁に、そして戦略的に用いられていたことを述べた(2014)。目次を見ると、「実践的翻訳論」(1号)、「翻訳論覚書」(2号)、「翻訳論の現状と課題」(3号)、「『翻訳論序説』」(第5号、6号、7号)などがある。つまり刊行されていた3年間の間、ほぼ毎月「翻訳論」にかかわる論考が掲載されていたことになる。同様に『翻訳の世界』でも、1970年代だけを見ても「翻訳論」という言葉が多く用いられ、磯谷孝による「翻訳原論」(1978年2月号から連載を開始し、1979年3月まで続く)も連載されていた。本項では、「翻訳論」という観点から1977(昭和52)年1月号の『翻訳の世界』に掲載された特集「聖書の翻訳」の堀田康雄の論考を

手掛かりに、聖書の共同訳とユージン・ナイダの翻訳理論が及ぼしたであろう影響について概観していく。

特集の最初の論考、「聖書邦訳の新方向＝共同訳聖書について」で堀田は「翻訳料理論」なるものを提起する。「翻訳料理論」は、現在の TS 用語で言うならばスコポス論的な観点を含んでいる。堀田は、料理は大まかに言えば、「材料を洗い、口に入りやすい形に切ったり小さくしたりした後、熱を加えて、“なま”の状態から食べられる状態へと移し変え、次いで材料本来の特質や持ち味を生かしながら味付けする、という三段階からなっている」と書く。翻訳とは原文の背景を理解した上で言語学的に意味されるものを的確に把握する「分析」を行い、次に日本語という別の言葉に移し替える「転移」、さらに日本語らしい文体へと「再構成」することが必要だと説く。そして、新しい聖書を翻訳する価値について料理を例にとり、「同じ材料を用いるにしても、手の加え方や好み、あるいは、場合によって料理が可能であるのと同じく、聖書翻訳も多様でありうるからである」とする。言い換えれば、翻訳者の描くスコポスの違いによって、読者層の違いによって産出される翻訳は多様であり得る。

かつて翻訳者は、どちらかと言えば、訳すべき原文に主として注意を集中しがちであったが、今日では訳文の用語や文体の「日本語らしさ」にますます意が用いられるようになってきている(堀田 1977 p.16)。

堀田は、さらに、読者の視点に注意を促しながら、起点テキスト中心的な考えではなく、目標テキストの観点を重要視し、日本語らしく訳すことに関心が向きつつあることを記し、続いて「動的等価訳」(ナイダ)について以下のように言及する。

この世界的レベルの基本原則に併せて特記すべきは、共同訳が学問的根拠に基づく翻訳理論に立脚している点である。それは最近日本においても一般の翻訳者や翻訳研究者の間で注目されているアメリカの構造言語学者 E・ナイダを主唱者とする *dynamic equivalence* (「動的等価訳」あるいは「動的対応訳」などと訳されている)理論である。(堀田 1977 p.18)

目標テキストにおける読みやすさを重視する、そしてそれは聖書をより多くの者に読んでもらうためであったのだが、ナイダの「動的等価訳」が聖書翻訳関係者以外にも注目されていたことを指摘している。これはナイダの理論が一般の翻訳家等に及ぼした影響を考察するうえで大事な一文である⁶。

実は 1966(昭和 41)年の夏に、日本聖書協会の主催で極東聖書翻訳者セミナーが開催されていた。このセミナーの目的は新しい聖書訳を作成することであり、そのために聖書研究者や大学教員などが集まったという。報告書には以下のような記載がある。

このようにして、聖書の共同訳への種は蒔かれたのである。発芽を促すために土に水をやり、あとは神がそだててくださる、そのような機会が 3 週間にわたる、超教派的な国際翻訳セミナーとして実現したのである。このようなセミナーは初めてで、東京の郊外、八王子で 1966 年 8 月 15 日から 9 月 2 日まで、聖書協会連盟の後援により、日本聖書協会が主催者、世話役となって開催された。このセミナーはナイダ博士の指導により進められ、アジアの 11 の国々から 55 人が参加し、そのうちの 30 人が日本からの参加者であった。日本の参加者の多くは後に共同訳のプロジェクトに加わった。(『聖書新共同訳について』1987 p. 11)。

共同翻訳のためのセミナーがナイダの指揮で行われていたことは興味深いことであり、堀田の名前は報告書の中に翻訳者としてあがっている。堀田はセミナーに参加し、ナイダから直接指導を受けた可能性がある。

ここで、ナイダの日本語版『翻訳学序説』(成瀬武史訳)から本書の目的がどのようなものだったのかを見ておこう。

今日の言語学、人類学、心理学の分野における発達の成果にしっかりと基礎をすえ、同時に聖書翻訳という限られた領域を、更にひろい翻訳活動一般にまで関連付けるようなものを、何か提供する必要に迫られてきたのである。本書はこういった需要にこたえようという一つの試みである(ナイダ 1972: ix)。

聖書翻訳という枠を超えた翻訳論の需要を受け、それに答えようとナイダが本書を手掛けたことがわかる。そしてナイダの目的は今日の TS におけるナイダの位置づけを見れば明確である⁷。

ナイダと共著で日本語版の『翻訳—理論と実際』(研究社 1973)や『意味の構造—成分分析』(研究社 1977)を刊行したノア・ブラネンは、最初は宣教師として日本に來日し、1967(昭和 42)年から国際基督教大学に勤め、1968(昭和 43)年から同大学で翻訳論を教えていた。聖書の共同訳プロジェクトにも貢献していたブラネンはナイダから翻訳論を学び、聖書訳に関わっていたという(『季刊翻訳』1月号 1973)。ブラネンは、『季刊翻訳』誌上の池上昌子のインタビューによると、国際基督教大学の翻訳論の授業でナイダの本をテキストに使用しており、さらにブラネンは「ひとくちに言って、ナイダ氏の翻訳論は翻訳を読む人々(受容者)の立場に主眼を置いている」(1973 x)と自ら解説する。そのナイダとブラネンの共著である『翻訳—理論と実際』の翻訳を手掛けた沢登春仁と升川潔(1973 vii)は当時の日本における翻訳を「当時の翻訳者がいかにして忠実に原作の意味や文体を伝えようと苦心したかは、想像にあまりある」とし、また翻訳は翻訳者個人の art(わざ)にすべてがかけられていて、翻訳の良し悪しを決められていたとする。しかし、ナイダの書籍は、究極的には翻訳を art だと認めたとうえで科学的な方法を提案していると指摘する。

読者の視点を、言い換えれば目標言語と文化に主眼を据えた翻訳理論としてナイダの理論は聖書訳に携わる人々を超えて、翻訳家や研究者に影響を与えたと言えるだろう。

『翻訳の世界』における聖書の特集は、その新訳への関心の高さと影響を表してもいたのであろう。同誌では1978(昭和53)年2月号にも「聖書翻訳の新段階」という特集を行っている。1960年代から始まったこの聖書の新訳に関わるプロジェクト、そしてそのために書かれたであろうナイダの翻訳理論が相次いで出版されるなど日本にも影響を及ぼし、両誌に掲載された他の論考でも言及されていることから、日本における翻訳論への関心を喚起し、読みやすい日本語訳という考え方を助長したと考えられるのではないか。

4. 誤訳の指摘と「欠陥翻訳時評」

「翻訳論」への関心と同時に、『翻訳の世界』では「欠陥翻訳時評」(別宮貞徳 1978一)、「誤訳英文法」(矢野徹、1979)などが掲載されていた。このことは、すでに言及したように湯浅が創刊号の編集後記で「(…)誤訳の諸問題を多角的に探ろうとの意図もあるが、とにかく読んでおもしろいものにしたい」(1976 p. 90)と書いていたことともかかわっているのだろう。実はこの流れは『翻訳の世界』ほど強調されてはいなかったが、『季刊翻訳』にもときおりみられた。例えば、『誤訳』(1967)を刊行した W. A. グロータースは、日本と欧米諸国とを比較し、大学教員が文学作品を翻訳している日本の状況を批判している。グロータースは、日本の大学教員はプライドが高く、わからないことがあっても、人に尋ねることをしないという。また大学教員は本を書く人であっても作家ではなく、読者の立場にたって翻訳することができていないと書く。さらに、日本の大学は学閥を持っているので、教員の行った翻訳に関して、他の大学の教員はほめることはできても貶すことはできないとも言う(『季刊翻訳』第1号1973 p. 118)。グロータースの批判は翻訳家兼「大学教員」である人々に向けられていたようだ。さらに『翻訳の世界』誌上でもグロータースは似たような批判を書いていた。

聖書の翻訳をめぐる問題は、言語学者の目から見ると、日本における翻訳のすべての問題の縮図である。いい仕事を残した翻訳家もいるけれども、一般に日本における翻訳には問題が多すぎる、第一に、翻訳者が大学の外国文学の先生だということ。すなわち多くは言語学の素養のない人々の手によって訳されていることである。その上、いけないことは、翻訳に対する批評がまったくと言っていいほどないこと。(1997 p.25)

ここには言語学者対文学者という構図があるようで、批判の矛先は明確である。このような誤訳指摘のあり方が後に別宮貞徳によって建設的な意味を持っていないと指摘を受ける。『翻訳の世界』は1978(昭和43)年の10月号から「欠陥翻訳時評」というコラムの連載を開始する。主な執筆者は別宮でのちに書籍化もされた。別宮はこのコラムの連載について「欠陥翻訳時評などといういささかショッキングなコラムができたのはそういうねらいなのだろうし、私がその大それた役を引き受けたのももちろん自戒の意味」とその目的を記し、以下のように続ける。

誤訳指摘は読者の知的好奇心をひどく刺激するものらしく、その種の本がでるときまっ

てよく売れる。読者としては、有名な学者翻訳家のはだか姿をのぞき見しているような気分になるのだろうが。しかし、ただののぞき見がりっばな絵になったためしはない。建設的な意味がなければ、誤訳指摘はのぞき見と同じく悪趣味である。建設的な意味とはほかでもない、のぞかれるほうが、のぞかれても平気な装いを身につけること。欠陥翻訳時評はさしづめその姿見といったところだろうか

(別宮 1978 p. 128-9)

「欠陥翻訳時評」はいわゆる誤訳の指摘とは異なり、建設的な意味合いを持っているという。別宮はその著書『悪いのは翻訳だ』(1971)の「欠陥翻訳時評第 100 回記念特別講演」でも「欠陥翻訳時評」を始めた理由について、「in particular には、たしかにこの時評は一つの効果を旨として出発したものではありません。翻訳の質の向上です。これは第一回の時評を読んでいただければわかります」(別宮 1988 p. 148)と記している。質の向上のために翻訳を批判したという点がグロータースと別宮との共通点である⁸。

ここでは、紙幅の関係もあるので、1978 年の別宮による初回コラムとそれに対する翻訳者からの反論のやり取りを取り上げる。コラムの第一回では都留重人他 13 名の共訳である『不確実性の時代』が取りあげられ、別宮は翻訳の誤りなどを指摘するだけでなく以下のようにしめくくる。

ご覧のとおり、たたけばたたくほどほこりが出るとはよく言ったものである。それにしても何十万の人間がこの本を一生懸命読んでいる姿を想像すると、何やらそら恐ろしい感じがしてくるのではないか。ほこりを払いながらご苦労なことだし、ほこりをかぶっているのにも気付かずになら、お気の毒なことと言うほかない(別宮 1978 p. 134)

この文章を読む限り、現代の目から見ると、建設的な翻訳批判と言えるのだろうかという疑問がわく。つまり、グロータースの批判との違いがそれほど明確ではないのである。実際に、翻訳を批判された都留は、『翻訳の世界』12月号に「欠陥翻訳時評に答えて」と題する反論を投稿する。都留は、翻訳に対する批判に答え、さらに私信にて翻訳の注文をするのが翻訳に携わる者の仁義であると記し、以下のように続ける。

(・・・)別宮氏は、権威ある『翻訳の世界』誌上で、私などの常識では思いもつかないほどの悪口を交えて、批判文を公表された。しかも、その内容は、右でお答えしたとおり、私ども共訳者一同にとり、特に痛痒を感じさせるものではない。本来ならば、お答えするまでもないと思ったのだが、掲載誌である『翻訳の世界』に敬意を表して、ここに一文を草した。(都留 1978 P. 90)

都留の応答からは個人攻撃をされたと感じていることが伝わる。この都留の反論が掲載された頁には「*編集部注」という断り書きがあり、当時の編者であった杉浦が以下のように解説を加える。

なお、当編集部では「欠陥翻訳」に対する批評活動を今後も小誌誌上にて続けていくつもりです。そうすることが我国における翻訳の質的向上に役立つと信じるからであり、読者とは無縁の狭い世界で私的に「欠陥翻訳」を指摘し合うのみでは、翻訳者仲間の「仁義」は守られても多くの読者に対する「仁義」には欠けると思われるからです。(杉浦 1978 p. 91)

ここでは編集部も翻訳の質の向上のために役立つと信じて批判を行うとしている。しかし、先述した別宮の言葉は、本意がどこにあったかはともかく、個人攻撃と捉えられる可能性の高い文章である。批判された者が理解したように、建設的ではない誤訳指摘と同等に捉えられても仕方がないのではないだろうか。

筆者は「共振と呼応」(2014)で「翻訳論」と「実践」が1980年以降にいかにか乖離していったのかを探りたいと書いた。しかし、この翻訳論という言葉はなかなか扱いにくい言葉である。「翻訳論」という際の「論」という言葉自体にあいまいさが含まれているからだ。「翻訳理論」といえば、理論の概念はともかく意味は明解である。だが、「翻訳論」という場合には、翻訳に関する意見を述べたり、議論をすることもその範疇であるため、「誤訳」や「感情論的な翻訳批評」もそこに含まれてくる。翻訳の質の向上やいかに翻訳を評価するのかという問題は現在のTSでも重要な課題であり、質という点に目を向けたことは評価に値する。だが、TSでは、恣意的ではない翻訳の評価方法の確立が求められ議論が行われている(たとえば、Juliane House 2014 や Joanna Drugan 2013)。批判の目的が、質の向上にあったとしても個人攻撃とも読めてしまう誤訳の指摘は、結論的に言えば、あまり建設的ではない。結果として誤訳が減ったとしても、翻訳を学問するということには貢献しなかったし、都留の反論からも顕著なように、翻訳家同士の連携を築くことにもつながらなかった。1970年代に「誤訳」に関する書籍が刊行されるのは読者の関心がわかりやすい誤訳の指摘に向いたからではないだろうか。それは今野が『翻訳の世界』について、『文学界』、『文芸』や『群像』というような同時代に刊行されていた雑誌の体裁をとって、「翻訳を学習技術的な面だけでとらえるのではなく、比較文化学の観点から論じて伝えましょうという姿勢ですね」、「学習者になると、どうも堅苦しくて難しいからついていけないという時代があったんです。それで良しとしていた時代があったんですね」と指摘しているように、一般の読者にはわかりにくい論考も多かった『翻訳の世界』だが、誤訳の指摘は、学問的な知識を必要とする翻訳理論とは異なり、一般の読者にわかりやすかったと考えられる。裏を返せば学問的な知識がなくても理解でき、おもしろく読めたということであろう。誤訳指摘の流行は、つまり、翻訳を学問化する方向ではなく、むしろ遠ざける方向に舵を取ることに貢献してしまったのだと筆者は現段階で考えている。

5. 翻訳専門学校と『季刊翻訳』、通信教育と『翻訳の世界』

1970年代に刊行された新聞を見ると、当時、多くの専門学校(専修学校)が日本で設立されていたことがわかる⁹。その中には、たとえば「通訳養成所」¹⁰、「科学技術翻訳士、翻訳技能研究講

座」¹¹、「通訳ガイド養成所」¹² など、通訳や翻訳に関するものも多く含まれていた。筆者はすでに日本における専門学校と翻訳雑誌の関係について言及したが(2014)、本論で取り上げてきた 2 誌も例外ではなく、本項では、『季刊翻訳』と専門学校、『翻訳の世界』と通信教育の関連性について指摘しておきたい。このような関係は日本に特有のものと考えられ、日本における TS の萌芽の行方ともかかわりがあると考えられるからである。

『季刊翻訳』は、その出版目的を見ると確かに研究誌として刊行されていた。すでに述べたように内容を概観すると翻訳論と実践をつなごうとしていたことがうかがえる。一方で、本誌の創刊も専門学校との関連の中で刊行された気配がある。翻訳家の大久保康雄の「創刊によせて 翻訳雑談」は、A と B の会話形式で書かれていて、以下のような対話で終わる。

- A それじゃ翻訳というのも、まんざら意味のない仕事ではないわけだね。
B 意味がないどころか、それはそれで大いに意味のある仕事だと思うよ。
A やれやれ、それで安心したよ。
B どうして？
A 翻訳に意味があれば、日本翻訳専門学校の仕事も大いに意味あるってことになるからさ。(下線強調筆者) (1973 p.114)

実は日本翻訳専門学校の名前は『季刊翻訳』第 4 号(1974)にも登場する。それは、池上昌子が「研究室めぐり」と題して行っていた学校訪問である。第 3 号までは、国際基督大学や上智大学など大学を訪問していたが、第 4 号では池上が日本翻訳専門学校を訪ね、冒頭には以下のような説明が付される。

- わが国では、翻訳学校はここだけという、日本翻訳専門学校が開校したのは、1 今年の 4 月である。翻訳界は、新人にとっては閉ざされた世界だったため、それを広げていこうという目的で設立された。(1974 p. 138)

池上によれば、この日本翻訳学校は日本で初めての翻訳の専門学校だったことになる。先ほど言及した大久保はこの専門学校の講師であった。実は、池上によって名前が挙げられている専門学校の講師陣、たとえば高橋泰邦、柳瀬尚紀、荒武三郎他は『季刊翻訳』に常時寄稿もしていた。翻訳学校のコースは、「小説の翻訳を主にする〈英米文芸科〉と、ノンフィクションや評論などの翻訳に重点を置く〈一般英文科〉」とがあり、コースは 6 ヶ月だったという(池上 1974 p. 138)。池上は興味深いことに「武富紀雄さんの授業も、翻訳の実習だった」(池上 1974 p. 140)と記している。「も」と記しているように、ここで行われている他の授業内容も翻訳の実習だったようだ。つまり翻訳論というものは教えられていなかったのである。

日本翻訳専門学校と『季刊翻訳』の接点はまだある。『季刊翻訳』にはいくつかの広告が掲載されているが、ここにも「本邦唯一の翻訳家養成機関……」と日本翻訳専門学校の宣伝があり、興

味深いのは、その所在地である。専門学校は、『季刊翻訳』の発行所であるみき書房と全く同じ住所になっている。

1977(昭和 42)年以降全国専修学校各種学校総連合会は継続的に『全国専修学校総覧』を刊行している。連合会の目的は、「専修学校及び各種学校における教育の振興を図ること」で、たとえば目的を達成するために「専修学校及び各種学校の地位の向上に資する事業」などを行っているという。連合会の現在の会長に小林光俊という名前があり、この名前は実は『季刊翻訳』の発行者として記載されていた。興味深い接点である。日本翻訳専門学校の名前は 1977(昭和 42)年度版の総覧には掲載されていなかった。とすれば、日本初の翻訳専門学校はそれ以前に閉校していたのではないだろうか。1977(昭和 42)年より前に閉校した専門学校と同時に『季刊翻訳』も終刊したとは考えられないだろうか。

『翻訳の世界』で重要な役割を果たした湯浅が、現在、バベル翻訳大学院の学長であることはすでに述べた。そのホームページ上で学長からの挨拶として、「バベルは 1974 年の創立以来、『商品としての翻訳』はどのようであるべきかを考え、独自の翻訳技法研究から生まれた「翻訳文法」と、インターンシップ、ワークショップをベースに実践的な翻訳演習を体系化したバベル翻訳学習システムにもとづいて、翻訳者を養成してきました。(・・・)」と述べている¹³。『商品としての翻訳』という表現は、学問的な翻訳よりは実務翻訳を思わせる。「翻訳技法研究から生まれた」というくぐりには、翻訳は技術であるという雰囲気はただよっている。『翻訳の世界』で、毎回掲載されていた「実践翻訳講座」では医療や特許関係の実務翻訳の方が多く扱われていた。

バベルは 1974(昭和 49)年に翻訳家養成講座(通信制)を開講している¹⁴。この講座は本科と基礎科に分かれており、宣伝文には「翻訳技術の基本はいうまでもなく鍛え抜かれた語学力(・・・)本講座の特色は、小手先のテクニックより英語力そのものを徹底的に養成することにあります」とある。またプロの翻訳家が求められていること、そして人材不足のためにアマチュアの翻訳家が手さぐりで行っていること、「職業としての翻訳業の確立は緊急課題となつてい」と書かれている。『翻訳の世界』はこの講座の広報誌的な役割を果たしていたようだ(『翻訳の世界』第 6 号 1977)。今野は「通信教育の PR 誌という側面は確かにありましたが、単なる広報誌レベルの雑誌ではなかった」と語っている¹⁵。つまり、『翻訳の世界』は翻訳の通信教育講座との密接なかかわりの中で刊行をされたものの、かならずしも講座の宣伝のみを目標にしていたわけではなかった。さらに今野は「執筆陣をみても、翻訳家だけではなく小説家や詩人、学者といったそうそうたる方たちが記事を書いていました。それが骨格となって、その上に、翻訳技術論とか通信教育論が展開されていたわけですね」とも語っている。

簡単にではあるが、1970 年代に創刊された翻訳に関する雑誌『季刊翻訳』と『翻訳の世界』と、翻訳の専門学校、そして通信教育講座との関連性を概観してきた。このような専門学校や通信教育が設立される中で、学問的志向を持った翻訳雑誌が誕生したというのは、日本の独特の流れであったのではないだろうか。Translation Studies の萌芽があつたにもかかわらず、それが展開せず、西欧とは別の道を歩んだ日本の TS の歴史と、このような専門学校の関連性については、他の地域との比較などを含め、より詳細な調査を要するだろう。

5. おわりに

本稿では 1970 年代に刊行された『季刊翻訳』と『翻訳の世界』を中心に考察してきた。少なくとも 1970 年代に刊行されたものに関しては、それぞれ翻訳論への関心の高さを示す特集や連載が組まれていた。確かに、『翻訳の世界』以降はより実務翻訳や誤訳を強調する流れもあったが、翻訳論と実践が乖離していくような顕著な現象は見られなかった。しかし、誤訳の指摘が学問として TS を設立していく際に及ぼしたかもしれない影響はより慎重に調査されるべきであろう。西欧と異なる流れの一つとして翻訳の通信講座や専門(専修)学校があげられるだろうが、本項で論じてきたように、上述した 2 誌も実はそのような学校や講座とのかかわりの中で創刊されたことがわかってきた。共通点としては、学校や講座では実践的であったのに対し、雑誌ではアカデミックな部分も強調されていたということであろう。

不十分ながら本論を書き終えて、少なくとも 1970 年代に芽生えかけた TS は、西欧の TS 界の動きと同様に大きく展開をすることはなかったが、しかし、確かにそこで生まれようとしていたということがわかってきた。1980 年以降、この流れはどこに向かっていくのだろうか。

今回は指摘や問題提起にとどまった事柄に関しても、今後さらなる調査をすすめ、日本における TS の発展のために、その足跡を追っていきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたって、The Japan Research Centre (SOAS, University of London)から助成を受け、国際日本文化研究センター(京都)に滞在させていただきました。また同センター図書館の方々に資料についてご教示いただきました。

本企画に賛同してくれた内山明子氏、コックリル浩子氏、佐藤美希氏と刺激的な意見交換ができました。

それぞれの機関、そしてみなさんに感謝してここに記します。

.....

【著者紹介】

佐藤＝ロスベアグ・ナナ (SATO-ROSSBERG Nana) SOAS, University of London 言語文化学部講師。

Translating Cultures 他を教える。著書に『文化を翻訳する』(サッポロ堂 2011 年)や若林ジュディと共編の *Translation and Translation Studies in the Japanese Context* (Bloomsbury 2012) 他多数。専門は Translation Studies でとりわけ文化翻訳や TS 史の研究に従事。連絡先:ns27@soas.ac.uk

.....

【註】

1 別稿「共振と呼応」でも言及したが、「翻訳論」と言っても執筆者によって使われる意味はさまざまで、「翻訳理論」ととらえている者もいれば、翻訳に関する考察や批評ととらえている者もいる。

2 近年、TS では文化と翻訳の関連を真正面から取り上げようとする動きがある。また筆者の関心事が文化翻訳の問題にあるので、ここで取り上げる。

3 <http://top.dhc.co.jp/company/jp/cp.html>

2015年4月15日アクセス

4 FITは1953年にユネスコの賛同を得て組織された。<http://www.fit-ift.org/> 2015年7月1日アクセス

5 今野哲夫『『翻訳の世界』元編集長今野哲男さんにきく』

<http://www.kato.gr.jp/konno.htm>

2015年6月30日アクセス

6 本特集号の佐藤美希の論稿にも、ナイダの翻訳論からの影響が『英語青年』にみられるという考察がある。

7 ナイダ研究所やナイダ・スクールが存在する(本特集の序文を参照されたい)。

8 大久保友博は時代性と消費者運動の観点から別宮の『欠陥翻訳時評』を肯定的に評価し、別宮は、特定の個人や出版社を批判していたわけではなく、欠陥翻訳を産み出すその構造を批判していたと指摘している。大久保友博「別宮貞徳と消費者運動」

http://www.alz.jp/221b/aozora/ts_bekku.pdf

2015年7月1日アクセス

9 「日本ビジネススクール」「グリーン英会話」「日本デザインスクール」など。朝日新聞 1971年12月26日

10 朝日新聞 1972年1月9日

11 朝日新聞 1973年4月2日

12 朝日新聞 1973年4月3日

13 <http://www.babel.edu/message/youasa.html>

2015年4月15日アクセス

14 <http://www.babel.edu/about/history.html>

2015年4月15日アクセス

15 今野哲夫『『翻訳の世界』元編集長今野哲男さんにきく』

<http://www.kato.gr.jp/konno.htm>

2015年7月1日アクセス

【参考文献】

House, J. (2014). *Translation Quality Assessment: Past and Present*. New York: Routledge.

Drugan, J. (2013). *Quality in Professional Translation: Assessment and Improvement*. London: Bloomsbury.

『季刊翻訳』(1973-1975) みき書房

『月刊翻訳の世界』(1976-1977) 大学翻訳センター

『翻訳の世界』(1977-2005) 日本翻訳家養成センター

W. A. グロータース(1973)「日本の翻訳界」『季刊翻訳』1号

W. A. グロータース(1977)「聖書にも誤訳があるか」『翻訳の世界』1月号

- W. A. グロータース(1967)『誤訳—ほんやく文化論』(柴田武訳)三省堂書店
青木保(1977)「人類学から見た翻訳機的位置」『翻訳の世界』2月号
池上昌子(1974)「研究室めぐり」『季刊翻訳』4号
大久保康雄(1973)「創刊によせて 翻訳雑談」『季刊翻訳』1号
鴻巣友季子(2011)『全身翻訳家』ちくま文庫
佐藤亮一(1976)「翻訳家の進出に期待」『翻訳の世界』11月号
佐藤=ロスベアグ・ナナ(2014)「共振と呼応 1970年代日本における Translation Studies の芽生え」
『みすず 11月号』みすず 6-13
杉浦洋一(1978)「編集室から」『翻訳の世界』1月号
杉浦洋一(1978)「欠陥翻訳時評に答えて」『翻訳の世界』12月号
全国専修学校各種学校総連合会(1977)『全国専修学校総覧』全国専修学校各種学校総連合会
祖父江孝男(1977)「訳語の選択と統一への提言」『翻訳の世界』1月号
都留重人(1978)「欠陥翻訳時評に答えて」『翻訳の世界』12月号
中村保男(1977)「別世界の翻訳」『翻訳の世界』2月号
日本聖書協会(1987年)『聖書新共同訳について』日本聖書協会
芳賀徹編(2000)『翻訳と日本文化』国際文化交流推進協会
別宮貞徳(1978-)「欠陥翻訳時評」『翻訳の世界』10月号
別宮貞徳(1988)『悪いのは翻訳だ あなたのアタマではない』文藝春秋
堀田康雄(1977)「聖書邦訳の新方向—共同訳聖書について」『翻訳の世界』1月号
横井忠夫(1971)『誤訳悪訳の病理』現代ジャーナリズム出版会
ユージン・ナイダ(1972)『翻訳学序説』(成瀬武史訳)開文社
ユージン・ナイダ、チャールズ・テイバー、ノア・ブラネン(1973)『翻訳—理論と実際』(沢登春仁、升川
潔訳)研究社
ユージン・ナイダ、ブラネン・ノア(1975)『意味の構造—成分分析』(沢登春仁、升川潔訳)研究社
湯浅美代子(1976)「編集後記」『翻訳の世界』11月号
米山俊直(1973)「“たしかにある”ということ」『季刊翻訳』2号